

(別紙様式 = 中学校用)

都道府県番号	23
都道府県名	愛知県

【    】

\*重点をおいた観点にチェックすること

学校名及び規模

小牧市立応時中学校						
学 年	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数
学級数	5	4	5	1	15	32
児童数	179	149	176	4	508	

研究の概要

(1) 研究主題

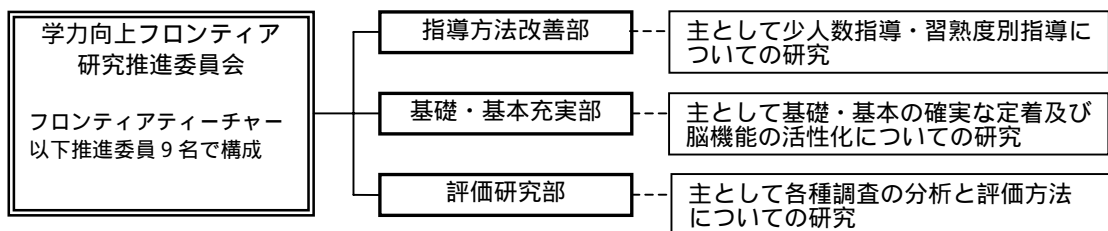
確かな基盤を身につけ、課題に立ち向かう気概を持った生徒の育成

(2) 研究主題設定の趣旨

「特活の応時」を合言葉とする特別活動において、様々な課題に直面しながらも意欲的に解決の方向に向かおうとする本校生徒の「気概」を、学習面にもさらに生かすことができるようにさせたいと考えた。そのために必要と思われる「基盤」について、次のように考え、実践研究に取り組むこととした。  
 学力の土台とすべき基礎的な知識・技能の獲得を促進すること  
 学力を自ら向上させるための学び方の獲得を促進すること  
 上記の2点が順調に進むよう「脳機能の活性化」を促進すること

実践研究の内容について

(1) 研究推進体制の工夫



上記のような研究組織を立ち上げ、全教員がいずれかの部署に所属し、研究に取り組んでいる。また、研究の成果を学校全体に浸透させたいとの観点から、基本的に全教科を研究の対象としている。

(2) 研究の実際

個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善に対して、今年度は、少人数指導と習熟度別指導を中心に取り組んだ。ここでは、それらについての数学科における実践を例として報告する。

少人数指導

本校では、個に応じた指導の中心的な取り組みとして少人数指導を位置づけている。少

人数で指導することにより、習熟が著しく進まない生徒をつくらないというのが基本姿勢である。少人数指導学級の編成に当たっては、学力差を考慮せず生徒名簿を使って、無作為に生徒を抽出している。この無作為抽出方式による少人数指導は、1年生の数学・英語及び2年生の数学において研究を進めている。

#### 習熟度別指導

本校における習熟度別指導は、目的や手法によって3種類に分類できる。ア.部分的習熟度別指導、イ.レディネス別指導、ウ.傾向別指導の3種類である。

アの部分的習熟度別指導は、本来的な意味での習熟度別指導であると位置づけている。すなわち、単元の指導の結果として、習熟に差が生じた場合にその習熟の差に応じて指導するというものである。まず、著しい習熟の差を生じさせないようにするため、無作為抽出方式の少人数指導を行う。単元の区切りとして「確認テスト」を行い、習熟に差が認められれば、その習熟の差に応じた習熟度別学級編成を行う。そして、習熟の差に応じて、発展的な学習を行ったり、補充的な学習を行ったりする。この方式は、主として1年生の数学において取り組んでいる。

後掲の図は、1年数学「比例と反比例」における単元指導計画図である。習熟度の高いAコースでは、問題処理の速度と正確さを同時に意識させることで、更なる意欲の向上と習熟の深まりをねらった。また、習熟度が中程度であるBコースでは、「つまずき分析」を行うことによる補充優先の指導を行った。さらに、習熟度の低いCコースでは、人数をできる限り少人数に限定することで、徹底した個別指導のできる体制をとった。

<「比例と反比例」(17時間完了)の指導計画(部分的習熟度別指導)>

第1次	3時間	比例	無作為編成による少人数指導	自己申告による習熟度別指導	第6次	4時間	比例・反比例章末問題の演習
第2次	4時間	比例のグラフ			Aコース (発展的)	速く、正確に問題を解くことを目標にさせることで意欲の増進を図る	
第3次	2時間	反比例			Bコース (補充優先)	自分のつまずきの原因やパターンを分析し、正確に解けるようにすることで、習熟度を高める。	
第4次	2時間	反比例のグラフ			Cコース (補充的)	通常の少人数よりさらに少ない人数で、よりきめ細かい教師からの個別指導を受けながら、基礎固めを行う。	
第5次	2時間	比例、反比例の利用 単元確認テスト					

イのレディネス別指導は、習熟の差というよりは、それまでの学習履歴の中で生じている広い意味でのレディネスの差に対応しようとするものである。たとえば、本校の生徒は英語を苦手としており、その傾向は特に2年生において顕著である。このような状況においては、無作為抽出方式の少人数では対応しきれないため、レディネス別の少人数指導を行っている。1年生までの英語の成績やNRTの結果などを参考にして希望調査を行う。教科担任は、これらの希望をもとに、場合によってカウンセリングを行い、1学級を2分割する形で習熟度別のコースを決定する。

ウの傾向別指導は、現在のところは、選択数学において取り組んでいる。通常の数学の時間のように、全ての生徒が同じ単元に関わる内容に取り組むのではなく、NRTの結果等に基づいて、レディネス別に学級編成をし、それぞれ補充すべき単元内容について指導している。学級によっては、一次方程式の解法に徹底的に取り組む、またある学級では一次関数の適用文章題に取り組むといった形である。この傾向別指導の今後の方向性としては、数量関係や図形などの領域別にコースを設定し、生徒の希望によってコース選択ができるようにしていきたいと考えている。

### (3) 研究の成果と課題

数値として表れる成果については、1月に行った目標基準準拠テスト(CRT)及び4月に実施予定の集団基準準拠テスト(NRT)の結果と分析を待たなくてはならないが、研究初年度として、その足場固めができたと考える。今後の課題の重点として、次の4点が挙げられる。

- ・ 15年度の基礎研究のための研究組織から、16年度における実践研究の深化に対応するための組織への改編
- ・ 「脳機能の活性化」のためのトレーニング法の開発と教材化
- ・ 少人数指導及び習熟度別指導に関わる指導体制と指導方法の確立及び指導と評価の一体化に向けたアイデアの発掘
- ・ 「ラボラトリーメソッドによる体験学習」(後述)の教科指導への応用

### (4) 研究成果の普及の方策

- ・ 1月14日 1年数学科習熟度別指導授業の公開
- ・ 2月25日 愛日地区学力向上推進協議会において研究成果の報告
- ・ フロンティア事業専用ホームページの公開  
<http://www.k-ohji-j.ed.jp/frontier/>

### (5) その他

本校では、学力向上の基盤として、「脳機能の活性化」を位置づけている。今年度は、脳機能を活性化させるため、音読やカウンティングテストを授業に取り入れてきた。上述の課題としても挙げたように、さらにトレーニング方法を開発するとともに、その普及を念頭に置いた教材化を考えていきたい。

また、もう一つの基盤として、人間関係を位置づけている。今年度は、南山大学人間関係研究センターと連携し、主として道德の時間を利用して、「ラボラトリーメソッドによる体験学習」に取り組んできた。今後、「体験学習」の考え方を授業に応用していくとともに、エクササイズの手法を応用した指導過程及び教材の開発を進めていきたいと考えている。

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- |                      |  |  |  |   |
|----------------------|--|--|--|---|
| 【新規校・継続校】            | <input checked="" type="checkbox"/> 15年度からの新規校 | <input type="checkbox"/> 14年度からの継続校          |  |   |
| 【学校規模】               | <input type="checkbox"/> 3学級以下                 | <input type="checkbox"/> 4～6学級               |  |   |
|                      | <input type="checkbox"/> 7～9学級                 | <input type="checkbox"/> 10～12学級             |  |   |
|                      | <input checked="" type="checkbox"/> 13～15学級    | <input type="checkbox"/> 16学級以上              |  |   |
| 【指導体制】               | <input checked="" type="checkbox"/> 少人数指導      | <input checked="" type="checkbox"/> T・Tによる指導 |  |   |
|                      | <input checked="" type="checkbox"/> その他        |  |  |   |
| 【研究教科】               | <input checked="" type="checkbox"/> 国語         | <input checked="" type="checkbox"/> 社会       | <input checked="" type="checkbox"/> 数学 | <input checked="" type="checkbox"/> 理科    |
|                      | <input checked="" type="checkbox"/> 外国語        | <input checked="" type="checkbox"/> 音楽       | <input checked="" type="checkbox"/> 美術 | <input checked="" type="checkbox"/> 技術・家庭 |
|                      | <input checked="" type="checkbox"/> 保健体育       | <input type="checkbox"/> その他                 |  |   |
|                      |  |  |  |   |
| 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 | <input checked="" type="checkbox"/> 有          | <input type="checkbox"/> 無                   |  |   |

**【特色ある取組としての紹介したいポイント】**

学力向上の基盤として、「脳機能の活性化」を位置づけ、脳機能を活性化させるため、音読やカウンティングテストを授業に取り入れている。また、もう一つの基盤として、人間関係を位置づけ、南山大学人間関係研究センターと連携し、主として道德の時間を利用して、「ラボラトリーメソッドによる体験学習」に取り組んできた点は、特色ある取組として紹介したい。